水滸傳

火之卷二

ホ 2
4565
2

門八 測3
號 9
卷 2

次2
4565
2

水火傳（ミヅホ） 火之巻（ヒノマキ）二

稲荷傳五十連法則（イナリノツラノリ）

空中水昊	暉火昊	昇水昊	水中火昊	火水昊	正火昊	火中水昊	火水昊	濁水昊	水火昊
ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

○ア行ハ天ヲ字ヲ行ハ地ヲ字ヤ行ハ人ヲ字皆君位ナルヲ是ヲ三行ハ

○ア行ヲ行ハ天地ヲ詞の活用ヲナレバ此二行ハ陰ヲカ行ハラ行ハ能詞の活用ヲナルは是ヲ八行の臣ハ

○カ行ハマ行ハ別ヲ能詞の活用ヲナルは是ヲ六行の臣ハ

○空中水昊或ハ暉火昊ナルヲ五言一行ハ連ナリナル一言完ハ別ヲ云時の火水ハ一言の法則ヲ以所ハ在此五言一行ハ躰ハ一言の法則の外ハ火水の扱ヲ用ナルハ可知

○此假名ハ後世の誤ヲ正ス イ|イ エ|エ ウ|ウの書方ハ仮ヲ加ハ見給ヘ

此五十連の十行に天地の音を含て人間此天を動す言葉に水火を天地に在る音を人に在故に己が口中に低唱高唱を顧ては天地の神明と通ず五国に唱る佛経天竺の音よりして伝る佛心通る本氣と氣の通る聲の通ずるを人間の音と耳の外に在る清神明の氣を天地に在て清し四海萬国の人言異なれども天に是を聞ては皆同一形に故に天竺悉曇漢國の易皇國の水火の傳各人の言を天地の神に天に天心を得るの法則形

○假名反之法則

上に起て其行の下に留る其処の約　一アエイの約　一形

辭言ヲテの約　一テアエテの約　一形

下に起て其行の上に留る其処の約

ツ千の約　一千形　コマカの約　カ形

右に起て左に行る右に反

ソトの反　ソ形　コトの反　コ形

左に起て右に行る左に反

ヨコの反　ヨ形　ホコの反　ホ形

上に起て曲の手に下に行る下曲に反

アメノトコタチの反　イ形　アシの反　イ形

下に起て曲の手に上に行る上曲に反

クニノトコタチの反　キ形　ヨシの反　イ形　金是に従ふ

假名に反は上の語に下の語に鍛て反に成て一語限に成る流れ其例

吾妹 本語マカイモちゝをカイを反ゝワキモゝ云。遠江本語トホツアハウこちゝを
ツアの反々、ハウの反フゝゝトホタフミゝ云。近江本語アハウこちゝをハウを反アフミ
ゝゝ是等疑ゝ反の例ゝゝ

傳○言霊一言之法則 此一言の法則ゝ天地自然の氣ゝ人間の詞を
此一言の事を反ゝ詞の心ゝ知ゝう

ア

空中氷ノ事 無ニシテ有也
五十連ノ総名。 天也、 海也、 吾也、 自然也、 ○也

イ

空中氷ノ事
出息也、 命也、

ウ

空中氷ノ事
浮昇也、 動也、 生也、 暗也

エ

空中氷ノ事
天地ノ胞衣也、 股也、 枝也

オ

空中氷ノ事
起也、 貴也、 高也、 旅也
此ア行ハ総テ天ニ位シテ親音也故ニ各擅音ニヒビクナリ
暉火ノ事 影也、 別也、 香也 必也 香也
黒也、 暗也、 大也、 上也、 數也、 疑也、 高也、 限也
賀是也、 陽ノ昇也、 家也、 草也 慰也 掛也

カ

影火ノ事
氣也、 正中也、 限也、 生也、 草也、 貴也、 来也
香也、 土也

キ

影火ノ事
氣ノ降也、 與也、 土也、 黒也、 香也 冥也

ク

ケ

影ノ火ノ氣　異也
差別也、正也、香也、器也、五穀也、家也
朝ヨリ夕暮ニ至ノ氣也

コ

影ノ火ノ氣　男也、女也　總テ人氣
凝也、器也、圍也、處也、細也、香也、小也
此カ行ハ天地ノ明暗時々刻々ノ別レ總テ言語ノ差別ヲ宰ノ行ナリ

サ

昇水ノ氣
割別也、細也、小也、女也、短也、誘也、放也、去也

シ

昇水ノ氣
始也、終也、死也、己也、幸也、司也、育也、石也
出水也、印也、進也、繁也、爲限也
水中ノ火ノ氣
澄也、洲也、直也、鳥也、穴也、差別也、黑也
文ナキ也　一也、住也

ス

セ

水中ノ火ノ氣
與也、助也、瀬也、背也、爲也、甲也

ソ

火水ノ氣　形無也、庭也、掃也
塩也、白也、底也、背也、始也、山也、磯也、所也
此サ行ハ天地及萬物ノ正中ヲ昇水也　總テ後ヲ宰ノ行ナリ

タ

水中ノ火ノ氣
裂也、種也、大也、多也、連也、胎也、縦也
滝水也　正也

チ

水中ノ火ノ氣　脂肉ノ火也、血也、地中ノ火也、草也
釵也、風也、父ノ氣也、息本也、五穀也、鳥ノ氣也
一也　年月日時ノ氣ナリ　隔限也

ツ

火中ノ水ノ氣
渦巻也、列也、續也、積也、約也

丁	卜	十	二	又
火水ノ子 右左也、掌也、風也、人也、發也、児ノ子也	水中ノ火ノ子　男也、軟也、解也、飛也、基也 人也、與也、止也、昇也、速也、前也、所也 此ノ行ハ萬物種ヲ宰テ一ヨリ百千ノ數ヲナス　総テ前ノ子アリ	火水ノ子　和也、女也、流也、下知也、正中ノ子也 凝也、双也、頭也、無也、生也、鳴也、汝也、躬也 過去　現在　未来ニワタル子ナリ	火水ノ子 天地也、日月也、水火ノ凝也、丹也、非也、従也	火水ノ子 黒也、暗也、終也、潤也、繹也、出入息ノ間ニ住ス 〇也

子	ノ	ハ	ヒ	フ
火水ノ子 水火ノ根也、母ノ子也、土也　鎮也	水ノ子 同水也、如也、差別宰也、切也、割別也、〇也 此ナ行ハ萬物ノ正中ヲ宰ナリ　カミ通也	正火ノ子 初也、發也、出入息ノ門宰也、土也、髪也、廣也 地ノ放ヲ宰也、端也、解也、實也 ワニ唱ル時ハ〇ノ口ヲナス也　語ノ下ニワニ言時ニ此ハヲ書也	正火ノ子　天ヲ同ル火ノ子也 日也、出入息ノ季也、穴也、采也、非也、否也、氷也 語ノ下ニイニ言時ニ此ヒヲ書	正火ノ子 火水ノ門宰也、紘也、合也、太也、吹也、覆也 語ノ下ニウニヒクモハ此フニ移テ書也

ヘ

正火ノ炅
隔也、経也、張也、縛也

ホ

正火ノ炅　毋也、火浮也、夫也
天地萬物ノ初也、子也、隠門也、臍也、袋也、丶也
日ノ炅ノ

マ

火中ノ水炅　潤水也
向也、眼也、回也、間也、曲也、大也、廣也、圓也
甚也、狗也、多也、女也、男也

ミ

火中ノ水ノ炅　潤水也
正中ヲ宰也、月ノ炅也、貴也、虫也、五穀也、渦巻也
暗也

ム

火中ノ水ノ炅　潤水也
無也、空也、息終也、暗也、結也、睦也、渦巻也
黒也

ノ

火中ノ水炅　潤水也
同也、芽也、正中ヲ宰也、女也、采也、海草也、馬也
群也、下知也

モ

火中ノ水炅　潤水也
舫也、竭也、赤也、者也、緊也、與也
此マ行ハ〇ヲ宰ニテ空躰ナリ

ヤ

火水ノ炅
文也、和也、沼也、家也、否也、水火ノ粤宰也
反ノ炅ヲナス也

イ

水中ノ火炅
入息也、命也
語ノ下ニ書イハ是也

ユ

水中ノ火炅
寛也、火水ノ和也、流水也、従ノ通音
兩ノ通音

エ

水中ノ火ヨ
溜水也、夜胞衣也、眠胞衣也、栄也、枝也

火水ノヨ
與也、女男契也、淀也、齢也、下知也

ヨ

濁水ヨ
降也、涎也、唾也

ラ

濁水ヨ
息息ノ兩也、人也、割別也、涎也、嚙也

リ

濁水ヨ
涎也、嚙也

ル

濁水ヨ
涎也、嚙也

レ

濁水ヨ
大海ノ場也　ラリルレロ四言此一言ニ凝場也故其四言ニ代テ助詞ヲ入有此ラ行ハ火水ノ別ナノ場ノ水ヨリ故ニ詞ノ上ニナクレテ助言ヨナス也

ロ

水火ヨ
國土也、水火水也、水ノ○ヨナ也、萬物ノ形ヲ宰也

ワ

水火ヨ
蒼空也、潮水也、引汐也、天地人萬物ヲ摺テ備ル井也

井

水火ヨ
渦巻水也、動也、沉也、暗也、黒也

五十連ノ活用ハ此ヨニ過タルハナシ

工	丈
水火夷 捌也、 胞衣也、 惠也、 回也	水火夷 縦也、 賤也 男也 終也、 折也、 居也、 小也、 女也、 芦也、 低也 此ノ行終テ地ノ字テ一言三テ一語ナス夷也

○三上言同義之法則

古傳

ヨ モ ロ

ヨヽ輿、モヽ舫、ロヽ場、故ヽ三上言同義ヽヽヽヽヽ其例

同

ナ メ ヽ

寐ヨヽヽ寐モヽヽ、亦寐ロヽヽ

同

此三上言ヽ各正中ヽヽヽヽヽ字故ヽ同義ヽヽヽヽヽ

ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ

ヤ行ヽ入息ヽヲ行ヽ入息ヽ擂の濁水ヽヲ行ヽ故ヽヲ行の假名ヽヤ行ヽ擂ヽ移其例

○故無 吾裏紐 令解 人莫知 及正逢 一カ果

○足千根乃母爾不所知 吾持留心者吉惠君之隨意

同

サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト

サ行ヽ後ヽ濁ヽ字ヽ夕行ヽ前ヽ字ヽ故ヽ相互ヽ移ヽ濁言ヽ

ヽヽヽ

本語トリシマリ形ラ川ヲ省シマリヲ反セトジ書。屑本語ノヴル
ヲ助言ヲ省ク。ダ書。疵本語キリサクヲ川言ヲ省
サクヲ反キズ書ラ偶ラ詞ヲ本尖水ノ三濁ヲ兼ル余従之

同

○従詞軽重動假名之法則

カ	サ	タ	ナ	ハ	マ
ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ

此ケセテネヘメの六言ヲ女音ヲ軽重語ノ時ヲ
上の段のカサタナハマの男音ヲ濁ヲ軽重ヲ従ヲ濁ヲ
濁ラヲ其例ヲ左ニ

菅菰ヲスガコモヲ風車ヲカザ車ヲ手枕ヲタ枕ヲ

稲延ヲイナバヲ十延ヲ十延ヲ苗代ヲ十代ヲ天照ヲアマテラスヲ
アマ照ヲ賀延ヲ軽重ヲ従ヲ音動ヲ其動ヲ詞ヲ菅菰
ヲ時ヲ下の語の菰ヲ用ラヲ重ヲ菅ヲ用ヲ軽故ヲ上の
菅のケヲカヲ濁ヲスガ菰ヲ風車ヲ車ヲ用ヲ重ク風ヲ
用ヲ軽ヲ故ヲ風のセヲサヲ濁ヲカザ車ヲ稲延ヲ延ヲ
用ヲ重ク稲ヲ用ヲ軽故ヲ稲のナヲナヲ濁ヲ十延ヲ
ヲ苗代ヲ代ヲ用ヲ重ク苗ヲ用ヲ軽故ヲ十八代ヲ動ク天照ヲ
照ヲ用ヲ重ク天ヲ用ヲ軽故ヲアマ照ヲ弁手洗ヲ時ヲ
ヲ用ヲ重ク故ヲ濁ラ天地ヲ時ヲ上下の語相對ヲ軽重
ヲ故ヲ濁ラ上下語の軽重ヲ図ヲ動ヲ動ヲ余是ヲ准
陽ヲ古訓ヲ右等の法則ヲ正ク書の上ヲ見ヲ
近世の人古訓ヲ誤ヲ此方の詞ヲ彼方の詞ヲ見合ヲ

著直に此の見めに解に詞に躰用殊重の與に

ちに活用をちに世の佐に者の力に太に有に

躰言　己定　下知

	カキタリリ	オイ	エラミミ	ナラヒヒ	イ	カモチチ	カナシシ	サユキキ	ヒラキ
	カヘルルル	オユ	エラムムム	ナラフフ	イ	カモツツツ	カナススス	サユクク	ヒラク
	カヘレレレ		エラメメ	ナラヘヘ	イ	カモテテテ	カナセセ	サユケケ	ヒラケ

此図二段の横は
収る音ハ詞の外
ちに一三段の横
に収る音ハ詞の
己定をちに四
段の横に収る
音ハ詞の下知
をちに活用をちに数者
の詞に此
三段のクスツヌ
フムユルのハ言に
収ちに中
中庸のヨラリ
○
アヤワの三行に
君位に詞の
活用をちに

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ									イ
ウ									ウ
ヱ									エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

星假名ハ天を宰
白の假名ハ地を宰
天地の音を以て引
時に同音をなす
其例
アウオウ。カウコウ
サウソウ。タウトウ
ナウノウ。ハウホウ
マウモウ。ヤウヨウ
ラウロウ。ワウヲウ
アウワウ。イウヰウ
ウウウウ。エウヱウ
オウヲウ
アウヨウ。ワウオウ
火相剋相剋に同じ
君位に天地相剋
活用に知君臣上
下に知和
知和音

○言靈作言

古傳

此作言に十言あり各詞に理を或に隠に自在なり詞の活用をちに起言補言助言の三の法則あり毒を先に

アイウオ

起言

此四言に語の上に在に語に起に理を或に隠に語の上に伝に法の中に居に一例

ア の言に語の上に現に隠に語の下に居に例

川合　大穴持　青旗　足痛　渡津海　朝奈　朝奈

イ の言に語の上に現隠に語の下に居に例

砥馴　汝　常磐　仮庵　明石　伊放　是茅の一に語に起に只上に在に

ウ の言に語の上に現隠に語の下に居に例

株　尾上　床上　目馬　水内　但馬

オ の言に語の上に現隠に語の下に居に例

同

シ ニ ツ　補言

此三言〻語の上中下共〻現隠〻の言〻〻甚例

思ヒ　生フ　田面　陸奥　風音　埴生　全是〻従

道　満太布　峯　脚帯　白髪　各隠〻那〻人シ　花シ　光シ

國ツ美神　上ツ瀬　下ツ瀬　見ミ不見ミ　朱鳥　是等現〻補〻那〻

同

ニ リ ル レ　助言

此四言〻詞の下〻〻〻〻現隠〻助〻〻〻〻甚例

鳥猟　己　左保解虫　是等〻〻〻言隠〻〻〻〻〻現〻助〻〻〻

紐〻詞の下〻〻〻〻皆助言〻〻〻〻但リの言〻別〻活用〻一言の法則の処を

見〻知給〻〻〻

附〻云　開キ　致ス　持チ　思ヒ　搦ミ　鳴キ　聞キ　是等の類ハ助〻詞の活用〻〻〻

○右の十一言〻〻各言葉の先〻〻〻〻の言〻〻〻故〻詞〻解〻詞の上〻アイ

ウオの四言〻〻〻〻起〻見或〻現〻〻〻〻省〻見或〻シ|ミツの三言を

〻〻補ひ毎〻下〻ニ|リルレの四言〻〻〻〻助或〻現〻〻〻〻省或〻反約〻一言

の法則〻合〻言の心を知〻〻〻

○詞〻解〻御葉〻現〻〻語〻直〻一言の法則〻合〻言の心を知〻〻〻本詞

〻〻〻〻葉〻現〻〻〻〻〻詞〻延開〻言の心を知〻〻〻

○言葉〻躰用の二ツ有〻〻〻御葉〻〻〻天地の葉〻〻〻躰〻〻詞の約〻〻〻〻用

〻〻〻故〻一詞の中〻躰用の葉の交〻〻〻〻〻〻躰〻〻現〻言〻甚〻一言

の法則〻合〻心を知〻〻詞の葉〻〻〻詞〻延開〻心を知〻〻〻詞〻延開〻何言と

限〻〻〻〻甚〻〻〻〻従〻毎〻〻〻水の巻の詞〻解分〻〻扱を見〻知給へ|

附〻云　後世の説〻サ|ニ言〻〻〻〻〻〻

○詞を解よ言語詞辭の四の差別を分て扱て言を二に分て
語は三言より五言まで舉て下の言の動て
活用なるを辭は其語詞に經て始終を結て
附て云コトは氷火嶽々を吹出すものをコトと云故に一言を云
コトハは風を訶の發て故に二言より五言まてを
發て云コトバは云ハ云ハの異て訶の葉の共發て詞の
下の言の動て發て讃の詞に別て解

○語

哥 ウタ 二言一語　家 イヘ 同上　庵 イホ 同上　山 ヤマ 同上　川 カハ 同上

枕 マクラ 三言一語　背 ウシロ 同上　形 カタチ 同上　東 ヒガシ 同上　桂 カツラ 同上

湖 ミツウミ 四言一語　自 ミツカラ 同上　壯鹿 サヲシカ 四言二語　曉 アカツキ 四言一語　手 タナ 同上

自 オツカラ 五言一語　長 トコシナヘ 同上　澪標 ミヲツクシ 五言三語　各下の言動に余は是に從

○詞

来 キタル　敬 チル　獨 カフム　思 オモフ　捌 タヒク

通 カヨフ　流 ナカル　癸 ムコル　萌 モエ　喜 ヨロコフ

短 ミシカキ　長 ナガキ　恨 ウラム　造 ツクル　盡 ツクス

調 トトノフ　狂 ヨワホフ　遊 アソブ

○音響之法則

ンツウイ

此四言は文字の引音を給て然を自ら用の誤の下に付キシチニヒミリ。
クスツヌフムル。此十四言は響音なり是を俗言に云那て故に哥に讀ム
其例

本語 音便
書 カキ カイ　蘭 ラン　上 カミ カン　丹 タニ タン　件 クダリ クダン　搽 ハキ ハン　神 カミ カン　新 ニヒ ニン
冠 カフムリ カンムリ　緑 エン　切 セツ　紫苑 シヨヲニ シヨン　牽牛子 コシ ケンゴレ　木丹 クダニ クタン　木蘭 モクラン　木槿子 ムクレニシキ ムクレンレキ 同

是等の唱は後世の人の說なれ和語を誤なり

右音鄉音と音軍故に下に在語を必濁言ちもとの其例

書附 上野 丹波 榛原 絣 富田 各下の言皆濁ちる余是に準ず

附ちる人此音便の假字まつ〻ウ〻紛〻誤多辟ゐむオモフ。イハフ。タマフ賀是の影のフの下に辞のテもなくて書もあちる其時もオモウテ。イハウテ。〻つ〻音便る書へ―む俗言ちる寄ちるオモヒテ。イハヒテ。〻雅言ちる書へ―

○言鄉

此言鄉ちる皇国の言自然に文字音の省のシツウイクキフムチ井。の十言〻鄉音ちる三の美色文字よ扱の所ちる

○入聲

此入声ちる皇国の語に漢国の文字音同ちるものちる和漢の語互に入交ちる入声ちる其ちに入声ちる文字音入聲の部ちる知ちる

菊 蝶 葉 福 徳 法 急 肉 薄 合 甲

此入声ちる亦音便ちるちる

入声 合 甲 法華 法度 急度 集註 薄荷 内挂

音便 通音

○國名之清濁者現氷土之清濁例

山城 大和 清音の國ちる氷土の清を知る丹波丹後ち濁音の國ちる

ちる氷土の濁を知る清音の国人ち言語の別正く濁音の国人ち言語の別正ちる其人事ちる押に知ち給人事ちる押に知ち給人事穀ちる準之

○國産之貴者同國名之呉例

紀伊 キイの反。キ那ち 蜜柑 カラアヒの反。キ那ち

甲斐 カヒの反。キ那ち 柿 カキの約。キちる

阿波 アハの呉。ア那ち 益田 アヰタマの反。アちる

安房 アハの呉。ハ那ち 鰯 ホシカの反。ハちる

同呉 同呉 同呉 同呉 同呉

武藏 ムサシの反。 三郡〻 紫 ムラサキの反。 三ちゝ 同昊

松前 マツマヘの反。 メ郡〻〻 メ〻海草の昊ちゝ 若布。荒布。昆布。 同昊

荷向 ノサキの反。 二郡〻 屋キ ノシの反。 二ちゝ 同昊

右の外國産の昊〻〻押〻知給ふ事— 結城ユウキ綿レイ昊ちゝ赤陶器スエモノ

古昔〻〻俗ふ瀬戸物〻唱〻其名〻百モト〻〻〻尾張〻在故〻貴〻〻

其〻昊現〻〻今上品〻出す其地の昊〻〻昊ユウ〻〻〻〻必現〻〻〻〻事—

○字ル地名ヲ御昊

アカサタナハマヤラ。ウクスツヌフムユ。オコソトノホモヨヲ。イ井キミシヒ 以上三十二言 千ケエエヱニ 十音の終音〻図〻五言加〻総て三十七言ちゝ

右の三十七言地名の頭ふ冠〻〻其例

阿波 アハ國并郡名 イタノ ミシマ ヨヱ ナノニシ ナカ アハ ミヨシ ナヒカシ カツラ 総九郡

讃岐 サヌキ國并郡名 オチ ミキ カカハ ウタリ タト カタ サムカハ アヤ ナカ ミノ 総十一郡

諸國是〻従

○東海道地名

シナガハ カハサキ カナガハ ホドカヤ トツカ フヂ井ハ ヒラツカ

オホイソ ヨダハラ ハコネ ミシマ ヌマヅ ハラ ヨシハラ

カンバラ ユ井 オキツ エジリ フチウ マリコ ヨカベ

フヂエダ シマダ カナヤ ニツサカ カケガハ フク井 ミツケ

ハママツ マヒサカ アラ井 シラスカ フタガハ ヨシダ ゴユ

アカサカ フヂ丸 ヨカサキ チリフ ナルミ ミヤ ノハナ

ヨツカイチ イレヤシ シヤウノ カメヤマ セキ関 サカノ反 ツナヤマ

ミナノ千 イレベ ノサツ オホツ 総て五十三驛

賀茂國郡邑里の名なども此三十七言を名頭に冠らせ
たり然るに言葉の法則をとりまとめ廣天下の地名もぬき其間の人
別名類称へ若百千遠ふさらは聞るとのまとも必言の輕重さを
まへ神國の地名を自然に清濁備へ既に頭に清濁を載る足に
濁を踏まを知の清傳なり

○因清濁爲詞差別法則

ワクラハ 和久良波

ワクラハ別なりラ助言ハを故に數多の中を別拔ふなる
稀なる事なる同一古今よ「和久良波」を同人ちらびたるなり

ワクラバ 和久良婆

ワクラハの葉にバハ二言異なるにバ濁言をもて助る
稀なる葉なる草木の異なる替りをふもなるなり

トヨミ 動

トヨミ〻清音なる時を音の低を字故に遠聞なる

ドヨミ 動

ドヨミ〻濁音なる時を音の高を字故に近聞なる

タキ 瀧

タキ〻清音〻唱なる五丈も十丈も高なる落なる

タギ 瀧

タギ〻濁言なる時なる谷河なるの必落なる

サリ 去来

清音〻サリなる去なる

ザリ 去来

濁音なる時なる来なる春去来なる春の来なるタラザリ来なるタ去なる

イサ　伊尤

イとは起言サとサフの反なれども不知なれば詞なれば更に不知なるべし

イザ　伊座

イとは起言ザは誘なるべし

此外月夜　月夜とは差別なれば水の巻に委しく

○同合之法則

此同合なれば詞に別なれども反なれば同じなれば同じなれば

なれば事の次第なれば撰なれば其例

霞　カスミの反　キ。　霧　キリの反　キ。　雲　クモリの反　キ。　煙　ケムリの反　キ。

右各唱に別なれども天地の氣なれば起なれば其同なれば同なれば

年　トシの反　チ。　月　ツキの反　チ。　時　トキの反　チ。　同同同

濡衣　ヌレキヌの反　ヌ。　毎名為負　ナキナオハスの反　又。　同同同

裏　トヨミの反　チ。　裏　トトロキの反　チ。　同同同

尋　タヅノの反　テ。　トノの反　テ。　形古今「やまとにはあめつちとなりてあめつちとなりて」

志保自星　シホジリの反　シ。　摺鉢　シホスリの反　シ。

此シホジリの伊勢なれば富士の山なれば比叡の山なれば

なれば同なれば同なれば

なれば同なれば

なれば同なれば

なれば同なれば

登なれば山なれば同なれば

なれば同なれば

なれば同なれば

なれば同なれば

譜曰

比多里太　比多里太　登良婆宇乃　加加賀

比多里太

此俗笛の譜〻房総二〻国〻在〻古昔〻風流祭禮〻毎〻六月の頃〻〻八九月の間国中一統の祭〻甚〻丈戦〻持木太刀〻桙〻大戦鞠戦〻係〻笛〻吹〻賀是此祭〻何時の頃〻始〻〻〻詳〻〻〻何葉の詩〻〻〻〻〻記〻〻〻〻〻〻〻〻然〻譜〻〻〻〻知〻〻〻〻詳〻〻〻

解曰

比〻〻〻フリの反の上〻〻多里太の里〻音響を〻〻〻多〻太〻〻〻〻格〻〻登良婆宇の良婆の反ラ〻〻〻登ラ宇〻〻乃〻〻〻〻加加〻カカの反カ〻〻カタの反カ〻〻〻賀〻〻カラの反の賀〻〻言〻〻フリタツタ降立フリタツタ降立寅卯乃方柄カタカラフフリタツタ立。如是古昔両譜の

旧例〻〻〻〻〻〻知〻〻〻〻〻〻〻〻〻

○三絃太鼓の音〻絃〻〻タチツテトの行〻在其訣此行〻水中の火を宇の故〻〻〻〻〻〻〻〻〻

神ヨ天の人を左目に兩眼を與へ色を見せるの爲に耳を與へ音を
聞せるの爲鼻を與へ匂を嗅せるの爲口を與へ言せるの爲に
此八の穴の用を八耳に具設耳に聞キ。鼻に嗅キ。眼に利キ。口に利キ。終キ
唱へ穴八所を名を故に聖德太子を八耳の王子と号し神明同躰にて
見聞の用を明らかに明らかなる天耶に神を依怙に五と人形
小天地を号し磨に磨き光を明らかに光を明らかにして神明の御
鏡の如く輝五色を分ち知る所を終る
此法則を牡鹿の八の耳を聞て萬物の音を聞給ふ

二ノ十八終